

平成 25 年度 第 6 回 マザーレイクフォーラム運営委員会 議事録

日時	2013 年 10 月 9 日 (水) 18:15~21:00	
場所	滋賀県庁北新館 4-A 会議室	
出席者 (50 音順、 敬称略)	石河 康久	滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課
	井手 慎司	滋賀県立大学環境科学部
	北田 俊夫	NPO 法人 びわこ豊穡の郷
	小林 泉	滋賀県琵琶湖環境部
	佐藤 祐一	滋賀県琵琶湖環境科学研究センター
	関 慎介	滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課
	中野 隆弘	びわ湖エコアイデア倶楽部
	野田 晃弘	NPO 法人蒲生野考現倶楽部
	松沢 松治	びわ湖の水と地域の環境を守る会
	村上 悟	NPO 法人碧いびわ湖
	村井 洋一	滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課
	望月 孝幸	滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課
	山口美知子	滋賀地方自治研究センター
	渡辺 維子	元：公益社団法人滋賀県環境保全協会
	【特別ゲスト】 嘉田 由紀子 滋賀県知事	

※今回欠席（敬称略）：川端隆弘（公益財団法人淡海環境保全財団）、伊吹美賀子（湖南流域環境保全協議会）、廣田大輔（滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課）、三和伸彦（滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課）、堀彰男（滋賀県魚のゆりかご水田プロジェクト推進協議会）

今回の決定事項（要約）

- ・ 第 3 回びわこコミ会議のフォローアップとして、関係資料の Web サイトへのアップや参加団体のエントリーの促進等を進めていく。
- ・ 今後の運営委員会は、課題ごとにチームをつくり検討していく形とする（タスクフォース型）。
- ・ マザーレイクフォーラムのロゴマーク（暫定版）が決定した。

1. 第 3 回びわこコミ会議のふりかえり

2013/8/31 に実施された第 3 回びわこコミ会議について、成果や課題のふりかえりを行った。委員より提示された意見は以下の通りである。

(1) 第 1 部

- ・ データを取りまとめた冊子について、水位や外来種に関する情報がないという指摘があった。また、そうした情報がないということは、県（あるいは運営委員会）がこれらのことを軽視しているのではないかという疑問を持たれてしまっていた。冊子のデータはマザーレイク 21 計画（第 2 期）の指標として挙げていたものを取りまとめたが、それ以外についても重要なものについては入れていかないといけないだろう。水位については、何をまとめればよいかテクニカルに難しい部分もあるが、検討していく必要がある。
- ・ 自席から発表するというスタイルは評判がよかった。和やかな雰囲気となった。

- ・ 会場からチャンネルキャットフィッシュ（アメリカナマズ）の状況について質問があったが、答えられる担当がいなかった。県からはできるだけ多くの部局から参加するようにしていきたい。
 - 全ての質問に答えることはいずれにしても不可能なので、その場で解決できなかった疑問については、Web サイト等でフォローアップしていくことが必要である。

(2) 第2部

- ・ 各グループで参加者が数名～十数名程度であったが、話し合う人数としてちょうどよかった。
- ・ 前回のびわコミ会議のイメージがあり、午前中で帰ってしまった人が複数いた。
- ・ テーマ名に地名を入れたら、その地域の人ばかりが集まった。地域に関する具体的な議論ができたという点ではねらい通りであったが、知っている人ばかりが集まってしまったため、より客観的な視点を取り入れられなかったという課題もあった。
- ・ 子どもが参加し、大人と対話することができたのがよかった。

(3) 全体

- ・ アンケートでは「満足した」と答えた人が9割程度いた。イベントとしては大成功とあってよいだろう。
- ・ 昨年のように、終了後に不満を訴える人はいなかった。その意味でもよかったといえる。
- ・ 企業の人が多数参加されたのがよかった。特に、工場長など責任ある立場の人が参加すれば、その下の人たちも参加するので、効果的である。
- ・ 三河湾から子どものまとまった参加があったのがよかった。
- ・ 内容の決定に時間を要したため、PRする期間が短かった。より早くPRすべきだった。
- ・ 大まかには今回の内容で、来年度以降のびわコミ会議も進めていくこととする。

2. 今後の進め方について

びわコミ会議の振り返りを受けて、今後の進め方について以下のような意見が出された。

(1) びわコミ会議のフォローアップについて

- ・ びわコミ会議で提示したデータやスライド、またびわコミ会議の結果概要については、Web サイトでアップしていく。
- ・ 当日疑問を提示された点については、Web サイトで可能な限りフォローアップしていく（チャンネルキャットフィッシュ（アメリカナマズ）の状況、水位のデータ、外来種のデータ等）。
- ・ びわコミ会議の結果概要については、参加者にフィードバックしていく。印刷物を配布するのは作業的にも大変なので、Web サイトのアドレスをメールで知らせる等する。
- ・ 当日参加した団体は85あったが、マザーレイクフォーラムへの登録を行っているのは50強である。まだ未登録の団体について、登録を進めるよう依頼していく。
- ・ 登録した団体のエントリーシート等について、琵琶湖政策課で整理したマップや概要はそのままWeb サイトにアップするとともに、エントリーシート・活動登録シートの原本についても合わせ

てアップしていく。マザーレイク 21 計画の柱との関係からも整理ができるとよいが、そうした Web サイトの構築は労力が伴うため、後述の体制とも合わせて検討する。

(2) 次回びわコミ会議について

- ・ 他府県の人たち（いい川・いい川づくりワークショップ等）、企業（湖南企業いきもの応援団等）、子ども（近畿「子どもの水辺」交流会、琵琶湖大使等）に早めに声をかけ、参加者を確保する。
- ・ 第 2 部のテーマ募集も早めに行い、参加者を巻き込んだ企画検討を行う。
- ・ 「こういう話を聞きたい」「こういうデータが見たい」といったニーズをあらかじめ Web サイトで募る。
- ・ より人目につくところでの開催も検討する（うみのこ（係留）、イオンモール、京都駅階段、グランフロント大阪等）。

(3) 運営委員会の体制等について

- ・ マザーレイクフォーラムとしてやることも見えてきたので、全ての事柄を運営委員会全体で議論するのではなく、課題ごとにチームをつくり検討していく形とする（タスクフォース型）。つまり、個々人がそれぞれやれること、得意なことを担っていく仕組みにしていく。そうすればやる内容に応じて、外部の人たちにも声をかけやすくなる。
- ・ 「滋賀グリーン購入ネットワーク」は一般社団法人であるが、県庁内に事務所を置き、企業からの支援等を得ながら独自の運営を行っている。設立経緯も含め、マザーレイクフォーラム運営委員会の見本となるので、今後の参考としていく。
- ・ 運営委員会だけで全てやろうとするのではなく、目的の重なる既存のネットワーク組織とも積極的に連携していく。例えば、淡海ネットワークセンター、環境学習センター、滋賀グリーン購入ネットワークなどである。また、それらの関係者が運営委員会に参画してくれば、連携も自ずと進むだろう。
- ・ 運営委員会は、びわコミ会議を単発のイベントとして終わらせるのではなく、次につなげたり、成果を蓄積したりしていくことが必要である。例えば、登録してくれた団体・個人の中からピックアップして、「びわこ新聞」のような形で活動を広報していくことも考えられる。成果が形としてまとまっていけば、外部からの支援も得やすくなる。
- ・ 広報や Web サイトの充実、Facebook ページの作成、エントリーシート等の募集や取りまとめ、外部からの支援の募集など、様々なアイデアを形にしていこうとすると、どうしても今の事務局だけでは担いきれない。資料作成等の実質的な作業のかなりの部分を琵琶湖政策課が担っているのも課題である。運営委員会の事務局は、どこかが片手間に担うのではなく、個人で色々な判断ができる専属の人が必要である。
- ・ そのためには恒常的に得られる資金が必要であるが、企業等から支援を得ることと事務局体制がしっかりしていることとは鶏と卵の関係にある。

3. マザーレイクフォーラムのロゴマークについて

マザーレイクフォーラムのロゴマークについて議論を行い、最終的に以下の図案が採用された。ロゴマークは、琵琶湖と魚を様々な色の円が取り巻いている形になっている。これは、琵琶湖の水や生

きものなどについて、市民、企業、専門家、行政など多様な主体が話し合い、課題を共有し、その保全や再生に向けて力を合わせて取り組みを進めていくという情景をイメージしている。

ただし、このロゴマークは、とりあえず広報上の必要性から決めた暫定版となる。今後マザーレイクフォーラムの活動が広がれば、より思いを込めたマークができるかもしれないし、また図案を広く募集するなどしてロゴマークをより皆のものにすることができるかもしれない。使う用途に応じて複数のロゴを作る必要がでるかもしれない。資金を集めてプロにつくってもらうことも考えられる。そうした今後の展開に応じて、ロゴマークは再検討していくものとする。



マザーレイクフォーラムのロゴマーク（暫定版）

4. 次回運営委員会について

- ・ 次回運営委員会は 11/5（火） 18:15～とする。
- ・ 次回は運営委員会内で課題に応じて検討するチーム（部会）の設定について議論を行う。すでに具体的なチームのイメージがあり、適切な人を紹介できる場合には、運営委員会時に参加してもらって構わない。
- ・ びわコミ会議のフォローアップについては、それまでに関係者で議論して進めておく。

【当日のホワイトボード】

《1部》

- 水位のデータがなかった → 軽視してるとみられて
- 7米種のデータをもとに出すべき
- 「びわ湖のデータそろってるのでは？」という見方
- ⇒ ML21 以外にも大事なデータは入るべき
- ⇒ Webサイトに掲載していく (PPTのみ) (希望もつければ)
- ・自席からの発表が良かった、告知がよかったです
- ・「アメリカンズ(?)の状況、担当は誰?」と知らせ
- 色んな人が参加を / Webサイトのフォロー

《2部》

11	2
12	3
13	1
14	4
15	6
16	3
17	4

- ・人数的にも良かった
- ・去年のイメージがあった、偉大な人がいた
- ・前半と後半で人の移動が少なかった
- ・地名を入れたら、守山の人が来た (知っているばかり)
- ・子どもも参加、有難い (子ども ⇄ 大人)

《ロゴマーク》

- ・使用法に依ってそのイメージがかわる
- ・よくして使えそう、自選は使えそう
- ・図案からボラージュ → みんなの思いを
- ・アロに作らさう
- ・今更作らない (特に)
- ・MUFとアロ

《今後について》

・(他府県)の人たちへのPR、声かけ (要約)

- ・テーマ募集、企画をより早く → 巻き込んだ検討
- ・「こういう話好きだ!」
- ・「こういうデータがほしい!」 → Webサイトでつくる
- ・子どもへの声かけ → びわ湖大使、近畿水の交流会 (いい川、いい水づくり) (全国)
- ・淡海の川づくりF (しか)
- ・淡路治水シンポ (12月)

- ・メンバーの新規加入、体制等
- 作る内容に応じた声かけ
- 個人がそれぞれ得意なことを担う仕組み
- 課題ごとにチームを作る (タスクベース)
- ・事務局の体制 = 7人体制 企業からの支援

モデル → GPN = 見本として & 連携先として

- ・ネットワーキングを既存組織との連携 (ネットワーキング → 学習の場)
- ・専属の人が必要 (個人的な判断可) 運用の場
- OR 他リソース連携

《全体》

- ・「満足した」が9割 大成功では
- ・もと早くPRできた
- ・不満を言われることはなかった
- ・企業の人に入ってもらう
- ・三河湾、子どももまじった参加
- 工場裏が果敢にも高まる

・85団体という規模は、**Follow**

→ 成果を返し、空の確保?

Webサイトにおいて (びわ湖新聞)

[蓄積していくことが大切]

・人目に付くところの開催 (うみのこ、若狭、行こうと、伊)

Webサイトの更新体制

・エンリ-見せオ(地図)

・計画との関係づけ

・Facebookサイト